痴呆老人のまなざし

大井玄
ohi gen

「で、先生は今までずっとお元気でいらして」、と百歳を超えたその女性が尋ねられた。

「はい、お蔭さまで大体は元気にして参りました」。私は、診察後、娘さんから振る舞われたお茶をゆっくり飲みながら答える。やはり明治の東京に生まれた「江戸っ子」は気遣いがあると感じながら……。

と、一、二分して「で、先生は今までずっとお元気でいらして」。私も同じく敬意を込めて、同じく答える。このやり取りを三回も繰り返すなら、老女の記憶は二分と続かないのが判る。はたして彼女の「長谷川式簡易知能評価尺度、HDS−R」の得点は3／30点だった。

彼女はまた礼儀正しい方である。私の往診を正座してお待ちくださる。あるとき急患が入って、伺う時間が大幅に遅れた。ベッドに横たわっていた彼女は、私が挨拶をすると慌てて起き上がられ、着物の前をかき合わせた。

「すみません。昨夜ぜんぜん眠られなかったものですから、ついうとうとしていました」

私は、いつものように彼女の体調を尋ねる。「ご飯は召し上がっておられますか」、「はい」、「お通じはございますか」、「はい」、「どこか痛いところはございませんか」、「ありません」。そして最後に「夜はよくお休みですか」、「ええ、夜はぐっすり眠れます」という答え。彼女は、自分がベッドに横になっている恥ずかしい状況を、とっさの作り話で釈明したのである。

彼女は夜になるとしょっちゅう娘を困らせた。角の炭屋に赤ん坊を忘れてきたから連れてきてくれ、と言い付けるのだ。そんなことないでしょう、と抗議してもひるまない。ついには掛け布団を持ち上げて、早く早くとせき立てる。しょうがなく娘がそこに入り込むと、彼女は安心したようにすやすや眠りに入るのだった。

娘は一計を案じ、横にすると目をつぶる「眠り人形」を買ってきて与えた。彼女は喜んで、かわいいかわいいと胸に抱きしめ、枕を並べるように寝るようになった。以後、赤ん坊を連れ戻せという要求はなくなった。

●

記憶力が衰え、月日や場所の見当識を失った人を観察した経験がなくとも、この老女の紡いでいる「意味の世界」は了解可能だろう。文化人類学者クリフォード・ギアツは、「ヒトは自分の紡いだ意味の網に宙ぶらりんになっている動物だ」と幾分のシニシズムをこめて言った。老女はそれを体現している。

この「意味の世界」では、彼女はまだ若い母である。あるいはまだ幼い童女かもしれない。しかも、訪れる医師に対するときには、客人への細かい気遣いを示す明治の躾を身につけた女主人だ。お客、しかも「先生」には、つねに礼儀作法にかなった態度をとらなければならない。いぎたない寝相を見られるのはもってのほかである。

われわれの言語中枢は、自分のとっている行為について、咄嗟にもっともらしい作り話をする能力がある。しかも、それが無意識に行われるという事実は、ここ二十年の認知心理学・脳科学が明らかにした最大の知見のひとつだ。

例えば、右脳左脳を結ぶ脳梁（神経の束）を切断した「分割脳」の人では、左右脳間の情報伝達はない。しかし、「分割脳」の人の右脳だけに「歩け」というモニター指示を与えると、その人は歩きだす。「どこに行くのですか」と聞かれると、「家に行ってコカ・コーラを取って来ます」などと左脳にある言語中枢は答えるが、右脳に「歩け」という指示が出た事実には気づいていない。作り話である。

●

ではなぜ「意味の世界」を紡ぐことが可能なのか。それはやはり認知心理学と動物行動学が説明するふたつの脳の働きによる。

まず世人は、その見るもの、聞くもの、触るものが世界を構成していると思っている。しかし、「脳は、その経験（閲歴）と記憶に基づいて世界を創っている」のだ。認知心理学では常識になっている事実だが、その逆方向の世界認識が世間の常識なのだ。

さらに、ヒトとチンパンジーの違いのひとつは、京都大学霊長類研究所の松沢哲郎によれば、ヒトには目に見えていないものをイメージする能力があり、チンパンジーにはない。その証拠にヒトの顔の輪郭を描いた図を示すと、チンパンジーはなにやらぐじゃぐじゃ描くが、ヒトの幼児は目や鼻を描きいれる。例外はないという。

われわれは、その閲歴と記憶に基づき、それぞれの「意味の世界」を紡いでいる。それは認知能力の衰えの有無に関係ない。「痴呆老人」の紡ぐ意味の世界を「仮想現実」と名づけた精神科医もいたが、「現実」も「仮想現実」もそれを創る心理的力動においては変わらないのである。その事実は、千五百年以上前に唯識を唱えた大乗仏教の僧たちが見いだしていた。

私の敬愛する百歳の老女は、若いときから老年に至るまでの人格変化を示していた。その自在さに感歎すると共に、彼女から学ぶのは、自我同一という哲学的主張の仮構性である。そこに彼女が身をもって教えてくれるのは、「諸法無我」、「諸行無常」という真理ではないか。

「痴呆老人」のまなざしは、それを語っている。

（おおい　げん・東京大学名誉教授）
著書に『環境世界と自己の系譜』みすず書房